



女
千代
物

藏

13
3396
4



和漢御書物所
越後柴田上町
新津屋太右衛門

小島

千代物語卷の四

目録

- 建弟永三希室の津へ通るしむべ 永三 希室 津へ 通る
- 附 千代女練言のり千代 女 練言 のり
- 千代女身千代 女 身のうへの大夏大夏を結結るる
- 附 遊女尾上自害遊女 尾上 自害のりのり

13
3396
4



日本 鎌倉 茅川師道圖

山陽 奇談 千代物語 卷之四

東都 鼻山人著

(七)

建部永之希室の侍(通)あり
 子代女練玄のり

人の身小国をうり 雑面めいなる一足どい悪しと抑の
 しまんやんをふ援州小塩の城主赤松則房の處
 長不建部永之希とりの者ありし生憎人さるく
 弓矢をく名ある侍士ありたるがは程あり 室の

Red square seal impression.

Red square seal impression with handwritten text.

つある尾上お押のひけく日毎小まの妙金の洋入
 通ひ来り破の是のと物まれども尾上お管
 子代おのほく結ぶの神懸く押のひ深あふ
 ちさくあつのもせきうこれが永之希の押のひ
 海増く通ひくるか遠あお男の急き地のもひ
 ぞうてあふいむ色もあうくるふ代もある付入
 永之希と出合く種ぐ世もの物増あひりともく
 切る丸親くともあり信ぐその人とありを何ふ

一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十

面入温和あつて心の中お我をほるす然も勇ま
 ありと禮懐厚くうれはる代入心の中お母のひさ
 ちの先ッ頃より防州の風雲を霧の種ふる定
 父さぬもア、桂鬼が後云の吉次おえうて今うけ
 妻ふなき人ともありあひつらん種ぶ何年一と父
 母の仇雷右門をト太刀ありト怒えんとおのりとの昔
 候ハ女子のゆめありいらあめそ我ま種まける事
 若を登らひにゆめをともさるやトおのひは昔一

永三弟が妻小頼母しきんごよ連れ共中情
 きの猪の像のあぐまぬの猪らひをもはして一十太
 るの怒をも散さやト物ひ付るが或夜はく
 笑ふ代はつみの下るふ臥るふ少し痛く
 聖者の肉あく永三弟が妻しき情をぬれが不作
 うの部まで我小頼直も道あぐぬ患あてんまほく
 物の長万の客小情を妻らうの妻あつトハ物人
 とも我ハ又依のふまて妻んと物ひがや部
 妻の長万の客小情を妻らうの妻あつトハ物人

妻の長万の客小情を妻らうの妻あつトハ物人

人をものすすふとの思我その影すま〜
 とあるものき猪はひ侍壬の母の面圓ま〜
 ちんごよのあれ命あから物のはひふ捨るぞト南宮
 ちんごよ代に怒るき猪との様〜
 永三弟の懐細〜抜て尾土が物え小指付らぬ
 あ〜は妻ら小判殺さんいまひあれがふ代に周
 喜早て押ゆりコハ消うらぬ由他業うま係るあらうま
 しねるの妻語あれあうづ〜先情〜其あふ免じて

宥ゆるしめくちびきるのありとりを永ながく希まれ白しろみを
おきり徳とく和わじけけ行ゆき状じやうを市いち目め不ふ熱ねつゆり矢や五ご身みの
倡うた始はじゆふ令れい命めいを日ひあきんるゆふ庭にわの程ほどめりんがく
あつれど餅もちう難たが面めんは女にめが會あ敷しの面めん傍はたき後のちふ
すす疾はやく着きの修しゆ是ぜい惟いなく邪じや謀まうらひゆととくく尾お上のうへ
程ほども思おもううき也や入いなくく中ちゆう通つううう市いち目めを
婦きよら人まへととああらら孫まごども昔むかし後のちハ外ぐわいふふ廿に廿にま
でもとらひ智ちたるたまのゆべ川か行ゆきの下した敷しのの髪かみり

ふみん

はいつおせん又またとととる振ふきひをハ智ちままト母ははのふ
物ものうら今いま又また市いち目めふ熱ねつるともあど五ご燭しやくののあありりををが
破やぶれれト母ははの切きつつひひぢぢふふ代しろハ笑わらひひの袖そでを
替かりりおん身みががちちままののゆゆふふ係けいののたたるるゆゆハ出い来きたたう
只ただゆるるゆゆも我われふふああううせせゆゆと只ただ音ねははりりて永ながく希まれふ
お向むかひひ是こゝののででちちささるるお縁ゆかりももああくく係けいののたたけ
身みをを妻つまふふ親おやとと市いち目め澄すみららひひゆゆふふのの程ほど法はふららぬぬ
歌うたまでまで見みてて結むすぶぶ切きるる切きるる患わづらををもも甘あまいい能よくく嫁よめをを

ぼらんけ後の整りの物も其の結びなるぞ
 まがと整の夜約を遠くまで流るせむとらふあぞ
 糸を糸の横を打実ふ下の方あるぬ由情の如ど
 あぞ他の中捨てまがや整の夜まの結五分の
 附しきまぐし尾上ぐるの只お捨てまぐびぬ人
 いで其解の難きを熱まのまぐぬるのゆも整の
 夜お解りゆりんと喉とて出ゆればふ代り尾
 上が備をくよう徳も危きことぞじ其を彼人を

ふ代りぬ

なまごめむんづりなるお解りゆりや出来らんト
 尾上の只候を流し捨しきけ身を妻と抱ひ
 おつせがお解りたるの抱んままであやまちし
 由んぎのあり難きまのまらるるから解りぬ
 整りたる糸を糸とぬきぬるのまがゆのひ切らん
 お捨てぬれよとまを流る整の夜束しり
 まと結束しぬあお解り不實なれ結人ふま
 へはまのぬふ其徳が操りぬとまを流る





汝も明んるものさあれど今日までい何るものさあ
 らうもぬあふ彼人のあれぬわのさあの結のさ
 ましとささくあゆみの深きさうさあさあさあさあ
 かんを待て候ふは道のせとの後いはいは男子の
 縁をいりて候らひるがやう遠背のあさあさああ
 むのさあさあを我と男とあゆみのさあさあさあさあ
 うらぬ情さあさあさあさあをいりてさあさあさあ
 陰もさあさああれがゆ華永三糸どのさあさあさあ
 子

あつらへ

昔の望をいりてさあさあさあさあさあさあ
 あれが同じ女のあゆみのさあさあさあさあ
 さあ尾上りあゆみのさあさあさあさあさあ
 あゆみのさあさあさあさあさあさあさあさあ
 日一飛渡り女子のあゆみのさあさあさあさあ
 歳までもさあさあさあさあさあさあさあさあ
 あつらひいりて君のあゆみのさあさあさあさあ
 中へさあさあさあさあさあさあさあさあさあ
 子

あつらへ

生田斐もあは川竹の身はと罪深しと夢の夢
 漢まゝたるは下は世の業報をばとこれゆ
 るのも未生を縁あらば生男子の佛をを
 頼しこれこそもたりの永三希さぬとまの
 らひをまゝの身はと人の二たりのを
 南無阿彌陀佛といふも思はず代が扱は
 唄人がつと実費き十九のを二朝しては世の
 をこそ思へるはこれば里の某が寺の境の

齊野土

一真亮芳婉信女と後の幸を人の風評と
 頼りたるふ代に周章おしこれどもや叶ふ
 あらざればんを頼り此ゆゑも縁ありて我大
 なるはれは切ありと調をいりさあね体あ
 を希ふ向ひ尾上り今もあふ流るん死あ
 立出る尾上の自害して彼も小臥居られ
 といふ人の定綱をと作をまれば子代に永

られ君と相知りまゝにせよあいら 後あるは心の中をあいら
 知り何卒は一大つをあいら 濁りまゝにせよ切ある恋のあいら
 由媒ら致せし由実ハ我大望を濁りまゝにせよあいら
 かし然る小尾上ハ我身をあいら 付し女子と知りしよりあいら
 妻を味まゝと身を捨て吾儕と君が縁を結あいら
 ると二つある妻の心あいら 女の子を胸けなまあいら
 妻の義理と我が二つある尾上があいら 身のなまあいら
 命を捨てし身をあいら 捨てしと我が二つある妻の心あいら
 命を捨てし身をあいら 捨てしと我が二つある妻の心あいら

あいら 七十三

介抱して一大つをあいら 濁りまゝにせよ切ある恋のあいら
 知り何卒は一大つをあいら 濁りまゝにせよ切ある恋のあいら
 由媒ら致せし由実ハ我大望を濁りまゝにせよあいら
 かし然る小尾上ハ我身をあいら 付し女子と知りしよりあいら
 妻を味まゝと身を捨て吾儕と君が縁を結あいら
 ると二つある妻の心あいら 女の子を胸けなまあいら
 妻の義理と我が二つある尾上があいら 身のなまあいら
 命を捨てし身をあいら 捨てしと我が二つある妻の心あいら
 命を捨てし身をあいら 捨てしと我が二つある妻の心あいら

なまきりの名ら敷とひそ我をう
あつと地のあもそのまればよ我

ト徳いんせあそのゆと藝れあつらるるもあつた
は建邦永三希の先つとふ昔やとあ親不別道今
孤独のああれが万増ん安くと供のふ代が福がひふ
あつと斯ああれ徳のひるるとや

平代物語卷之四終



平代四十五

平代物語

